AES
The Art Education Society of Japan

一般社団法人
日本美術教育学会
会報
2023
03.31

○事務局　新関伸也
〒520-0862 滋賀県大津市平津二丁目5－1
滋賀大学教育学部 新関伸也研究室
e-mail: honbu@aesj.org
tel/fax: 077-537-7720
○編集部　松岡宏明
〒546-0021 大阪市東住吉区照ヶ丘矢田二丁目21-9
大阪総合保育大学 児童保育学部 松岡宏明研究室
e-mail: h-matsuoka@ionan.ac.jp
tel: 06-6777-8029（内線640）
fax: 06-6702-0322（大学事務局）
○編集部（会報）　水谷誠孝

第72回学術研究大会 岐阜大会に向けて

岐阜大会実行委員長
元津島市立
高台寺小学校校長
浅尾 知子
ASAO, Tomoko

岐阜大会開催に向けたこれまでの活動の概要

岐阜大会開催に向けての実行委員会が立ち上がった経緯を、愛知、三重、岐阜の会員の皆様と辿ってきた出来事を振り返りながら、伝えたいと思います。

今から12年前、2011年8月に、日本美術教育学会学術研究大会の記念すべき第60回京都大会が盛況に開催されました。翌年の第61回愛知大会は、学会活動の歴史や研究成果の上に立って、新たな一歩を踏み出す大会でした。愛知大会は、愛知県美術館のある名古屋市中区の愛知芸術文化センターを会場に、本学会と愛知県美術館の共催事業として開催することとなりました。単発的ではなく連続性や発展性を大切にしようとした京都大会の姿勢を受け継ぎながら、充実した愛知大会を開催するため、2011年2月に準備委員会が立ち上げられ、2011年4月に第1回目の実行委員会が開かれました。実行委員長を小林修先生、事務局長を藤田雅也先生が務められ、第61回愛知大会のテーマ「ひろがる美術教育～響きあう感性と知性～」について実行委員会で議論したことが、つい昨日のことのように思い出されます。

愛知県美術館は「美術館の利用者が美術を通して人生を豊かにする」という理念のもと、美術館を利用する多様な鑑賞者が作品鑑賞を通して、経験や知識を向上させ、それを共有することを目指しています。2002年からは「鑑賞学習交流会」という名称で、展覧会の説明に加えて、学芸員や教員が美術館や学校での実践例を発表したり、鑑賞学習に関わる情報や意見を交換したりできるような活動を行ってきました。この活動を通して、愛知支部会員の藤田雅也先生、小崎真先生、岡島叔子先生と出会う機会をいただきました。

2006年以降、愛知県美術館は、さらに美術館と学校が連携を深め、鑑賞学習を深く掘り下げるために、学芸員藤島さんが中心となって鑑賞学習ワーキンググループ（以下鑑賞ＷＧと表記）を発足させました。小崎先生、岡島先生や私をはじめ、鑑賞学習交流会に参加をしていた教員が発足当時のメンバーとなりました。幼・小・中から高校、大学教員も加わり、学年、学校の区分を超えて教員同士が交流できる機会でした。作品の鑑賞方法について、専門的な立場である美術館と多くの教員が取り組めるような鑑賞方法を研究したり、学芸員と鑑賞WGの教員が愛知県美術館の教育事業を行ったりと活動の場が広がりました。例としては、文化庁の補助金を受けて企画した鑑賞学習補助ツール『あいパック』や『あいパックプラス』の作成、子ども鑑賞会の企画運営等です。

第61回の愛知大会では、こういった鑑賞WGの活動を、美術館プログラム「愛知県美術館と学校の連携　～コミュニケーション能力を育む鑑賞活動の取り組み～」という題

目で、愛知県美術館主任学芸員・藤島美菜氏、尾張旭市立渋川小学校教諭（当時）・岡島叔子先生、飛島村立小中一貫教育校飛島学園（当時）・浅尾知子の3名で、発表させていただきました。また、「あいちトリエンナーレ2010」のアーティスト派遣事業における中学生と作家との屏風制作についても発表させていただきました。

愛知大会を通して、学会の役員の皆様や愛知大会の実行委員の皆様とのご縁をいただいたことは、その後の教員生活の中で、かけがえのない宝となりました。愛知大会の実行委員には、愛知支部会員だけでなく、岐阜県、三重県の全会員にも協力を依頼し、3県から15名の会員の賛同を得ることができました。岐阜県、三重県の会員数はそれほど多くありませんが素晴らしい実践や研究をされている方が多く、愛知大会においては、支部の枠を越えた新たな交流を深める機会となりました。愛知大会開催後には藤田雅也先生が事務局を務めてくださり、愛知、三重、岐阜の会員で構成された「東海地区研究会」が立ち上がりました。この研究会では、造形実技講習会として、「蜜蠟クレヨンの製作」（講師：水谷誠孝先生）、「羊毛フェルトでカラフル音玉をつくろう」（講師：堀祥子先生）といった会員が講師となった講習会も行いました。また、東海地区研究会とものづくり教育会議の共催で、日々の実践内容や子どもたちの作品を展示した『造形教育フォーラム2013』を行い、東海地区研究会メンバー10名を含む15名の実践者が展示発表を行いました。

また、東海地区研究会メンバーが中心となって「学校美術館（スクールミュージアム）」という実践も行いました。小中学校の校内に作家作品を展示し、作家が作品の前でギャラリートークを行うという活動です。作品が展示されている空間に足を踏み入れた瞬間、子どもたちから歓喜の声が上がり、非日常の空間へいざなわれました。本物の作品のもつ魅力が、子どもたちの心に届いたことが、鑑賞後の感想でわかりました。この学校美術館（スクールミュージアム）の取り組みは本学会でも発表をさせていただきましたが、その後10年間という長きに渡って、私の勤務校で開催させていただくことができました。本学会からは、江村和彦先生（陶芸）、新實広記先生（ガラス）、西村志磨先生（陶芸他）、藤田雅也先生（石彫）、堀祥子先生（染色やテラコッタ）、松下明生先生（日本画）、水谷誠孝先生（テンペラ画）他、多くの先生方にご協力をいただきました。ひとえに、会員の皆様のご厚意の賜物です。多くの子どもたちに、夢と感動を与えてくださいました。

加えて、淺野卓司先生の勤務校での研究会の実施や、森敏子先生が、長年主宰される「子ども絵画教室　アトリエ　エピ」への訪問など、研鑽を積むことができました。このように、東海三県の会員が学会以外の場でも交流を深めてきました。

その後、第67回三重大会開催に向けては森敏子先生が実行委員長、藤田雅也先生が事務局長となり、実行委員会を立ち上げました。実行委員には、愛知大会で実行委員を務めたメンバーも加わり、ここでも東海三県のメンバーで大会運営に携わることができました。三重大会では「伝統からの創造～未来と過去をつなぐ美術教育の力～」というテーマのもと、水谷誠孝先生が基調提案をされました。記念講演や共同討議、研究発表はもちろんのこと、伊勢型紙という伝統工芸のワークショップや懇親会で披露された伝統芸能など、運営面においても非常に学ぶことが多かった大会でした。

岐阜大会実行委員会の立ち上げ

愛知大会、三重大会は、学会本部からの温かいご助言のもと、東海三県の会員のチームワークにより無事開催することができました。その後、学会本部からの同地域での大会開催の打診に加え、第67回三重大会にて岐阜県での大会開催の話題が上がっていたことを受け、中部ブロック代表委員の藤田雅也先生が愛知県、岐阜県、三重県の会員に実行委員会への参加を呼びかけてくださいました。その結果、20名を超える参加者があり、岐阜大会の開催に向けて実行委員会を立ち上げることとなりました。コロナ禍のため、第1回の実行委員会は、2021年10月にオンラインで行いました。実行委員の自己紹介から始まり、運営組織について話し合いました。その結果、運営組織として大会委員長：浅尾知子、大会副委員長：藤田雅也先生、大会事務局長：堀祥子先生に決定しました。その後、岐阜大会の方向性、大会テーマ、講演、共同討議等についての意見交換を行いました。その場において、実行委員会開催に合わせ、日本美術教育学会東海地区研究会（研究交流や造形実技講習会）の開催を検討していくことが確認されました。第2回実行委員会も2022年2月にオンラインで行いましたが、第3回実行委員会は、岐阜大会の会場となる中部学院大学各務原キャンパスにて行うことができました。岐阜大会を機に入会してくださった八桁健先生（中部学院大学）のご尽力のおかげです。大会の方向性について情報を共有したり、実際の会場を下見したりすることができ、改めて対面での実行委員会開催のありがたさを実感しました。その後、オンラインで第4回の実行委員会を行いました。第5回実行委員会は2022年10月に対面で行いました。岐阜大会を機に学会に入会してくださった先生方の自己紹介や実践発表をうかがうなど、とても良い研修の場となりました。さらに第6回実行委員会は、3月に対面で行い、日程や共同討議についての具体的な検討を行いました。

岐阜大会の概要

＜第72回岐阜大会テーマ＞

生きる源流としてのアート

～ひと・もの・ことがつながる美術教育～

＜テーマの背景＞

自然豊かで森林の多い岐阜県は、木の国・森の国

とも呼ばれています。濃尾平野に流れる「木曽三川」は、日本の中心を流れる大河川で、水力エネルギー量は全国上位を占め、それに伴って、様々なものづくりや産業が生まれ、技術や伝統が多く受け継がれています。

水は人が生きていくうえでの源であり、水の流れは人が生きていく営みとしてとらえた時、「生きる源流」という言葉が生まれました。美術教育においても長い歴史があり、感じることや表現することは水の流れや水脈のように広がりをもち、また変化し続けるものであると考えています。

過去と現在、未来をつなぐ日本美術教育学会の歴史や流れ、そして、ひと・もの・ことなどがつながる美術教育について議論できる大会になればと考えています。

日程と内容について

＜8月10日＞

・夕刻：エクスカーション（ぎふ長良川鵜飼見学）

大会前日の開催ではありますが、歴史ある長良川の鵜飼いを見学しながら、文化や歴史を堪能していただける場となりますよう計画しています。

＜8月11日　大会1日目＞

・午前：開会行事、基調提案、共同討議

・昼：総会

・午後：研究発表、記念講演

・夕方：交流会（中部学院大学内、学生会館）

大会1日目終了後、気楽なおしゃべりで1日を振り返りましょう。コロナ禍において叶わなかった対面での交流の場が、久しぶりに復活できそうです。まずはちょっと一息ついて、会場内で情報交換をしましょう。岐阜の風土や文化を紹介する企画も計画しています。

・夜：懇親会

大会会場より徒歩で10分程度離れた各務原市産業文化センター8階(展望レストランぶるうすかい)にて行います。大会テーマや美術教育について、より深く語らう場となるよう計画しています。

＜8月12日　大会2日目＞

・午前：鑑賞AR（拡張現実）体験鑑賞ワークショップ

岐阜県美術館で実施している拡張現実で、収蔵作品を鑑賞する体験をしていただくワークショップです。

岐阜県美術館「おうちに居ながラー美術館」で配信しているAR作品を使って、美術館以外の場所で作品鑑賞したり、身の回りの風景や作品を置いてみたいところで写真を撮影したりします。参加費は無料ですが、お手持ちのスマートフォンやタブレットなどの端末に専用アプリをインストールして体験します。

美術館に行けなくても、学校や自宅で鑑賞を楽しむツールとして、どんな活用方法があるか、参加の皆様で考えてみませんか。

・昼：研究論文・実践報告の書き方初級セミナー

松岡宏明先生（編集部：大阪総合保育大学児童保育学部教授）を講師に、研究論文や実践報告の書き方初級セミナーを企画しています。どうぞ奮ってご参加ください。

・午後：研究発表、総括

基調提案

堀 祥子先生（名古屋女子大学文学部准教授）

岐阜は、山々に囲まれ、それらを源流とする大きな河川に沿って育まれた土地です。山の恵み、水の恵みを利用する暮らしから生まれた伝統や文化、産業、教育について紹介します。大会テーマについて考えるきっかけとし、共同討議へつなげていきます。

共同討議

人が生きる源流はどこからくるのか、および、アートとの関係性をパネリストの実践や研究内容を通して考えます。フロアの皆さんと一緒に「ひと・もの・こと」がつながることで見えてくるものは何か、そこに美術教育がどう関わっていくのかについて討議したいと思います。

＜パネリスト＞

今村 光章 氏（岐阜大学教育学部教授）

金山 智子 氏（情報科学芸術大学院大学 教授）

浅尾 知子　（元津島市立高台寺小学校校長、現飛島村教育委員会就学支援CO）

＜コーディネーター＞

堀 祥子先生（名古屋女子大学文学部准教授）

記念講演

齋藤 亜矢 氏（京都芸術大学文明哲学研究所教授 ）

人が生きる源流にどうして表現があるのか、人は生まれてから、どのように表現を獲得していくのか、といった齋藤先生のこれまでの研究や現在の研究を基にしたお話をうかがう予定です。

大会会場

会場となる中部学院大学各務原キャンパスは、最寄りの駅から緑豊かな学びの森を通り抜けた場所に位置しています。キャンパス周辺は、各務原市の中心でありながら歴史や文化を感じられるスポットです。特に4月には、見事な桜並木が広がる新境川が近くにあり、美しい景色を仲間たちと共有しながら散策できます。

なお、8月11日は、会場周辺で花火大会の開催が予定されています。宿泊先の確保などは、早めに行っていただきますよう、お願いいたします。

愛知・三重・岐阜の三県による実行委員一同で、大会を盛り上げていけますよう精一杯尽力してまいりますので、どうぞ奮ってご参加いただきますようお願いいたします。

「子育て支援ひろば『すくすく』」のアトリエ空間の設置に関わって
～アトリエ空間の構成とアトリエでの研修についての報告～

神戸親和女子大学　教育学部児童教育学科　講師

須増 啓之　*SUMASU, Hiroyuki*

はじめに

私が所属している神戸親和女子大学（以下、本学）のキャンパス内には、「地域子育て支援拠点事業」の一環として神戸市より委託を受けた「子育て支援ひろば『すくすく』」（以下、『すくすく』）がある。これまで『すくすく』は乳幼児期の子供が遊んだり、親が保育アドバイザーに相談したりする場所として、子供と保護者の支援を行ってきた。また、学生の学びや地域との繋がりの場として活用されてきた。しかし、『すくすく』を運営していく中で、単に子供が与えられた玩具で遊ぶ場やその姿を見守るだけの場としてだけではなく、『すくすく』の新たな役割や可能性を見出すことも求められてきた。

そこで、レッジョ･エミリア市（以下、レッジョ）の乳幼児教育の哲学と実践に詳しい森眞理氏（本学教授）が中心となり、2021 年 1 月より、『すくすく』内に子供や保護者、保育アドバイザーらが「驚く」、「発見する」、「探究する」ことができる居場所としてのアトリエ空間を設置する「アトリエ構想プロジェクト」を展開していくことになった。本プロジェクトメンバーは、保育学・幼児教育学専門の森氏や猪田裕子氏（本学教授）ら教員と、本学地域連携センター職員、『すくすく』勤務の保育アドバイザーで構成されている。私は美術（教育）の側面から、本プロジェクトに参加することとなった。今回は、『すくすく』におけるアトリエ空間の設置の概略や、私が行った研修などについて報告したい。

なお、アトリエの意義やアトリエ空間設置の過程について、詳しくは共著論文「大学キャンパス内における『子育て支援ひろば「すくすく」』の役割の変化～アトリエ空間の構成から～」[1]を参照されたい。

1.『すくすく』におけるアトリエ空間の設置

森はアトリエを「子ども一人ひとりの 100 の言葉という表現に価値を置いている空間であり、子どもの創造性、想像性と審美性を育むための空間であると同時に、子どもが素材や環境との関わりや実験と研究を通して、自らの表現を通して知識を構築し、新しい価値を生む空間」と捉え、「乳幼児教育施設内外の空間との対話という開かれた関係性を強調」するものとしている[2]。

今回のプロジェクトでは、アトリエ空間の設置だけではなく、子供や保護者、保育アドバイザー、教職員、学生の変容に繋げていくことも目的にしている。そのためにレッジョでインターンとして研修されたアトリエリスタや、レッジョの実践にインスパイアされた保育を実践されている保育園の代表の方を講師として招き、研修やアドバイスを得る機会をもつこととなった。2021 年 1 月から現在（2023 年 3 月）までに、講師らとアトリエ空間設置のための意見交換や体験などを含む研修を 9 回行ってきている。その中で、『すくすく』の空間（大きな窓や舞台など）を生かすために、レッジョでの実践を参考に「光と影」をテーマにしたアトリエ空間を構成することが決定した。それに合わせて棚や素材、機器の購入、設置工事などの準備を行った。

アトリエ空間の設置以前の『すくすく』は、子供が遊んだり、学生のプログラムや親子支援のイベントなどの活動を行ったりするために、中央の空間を広くとった環境であったが、講師から助言を得ながら構成していったアトリエ空間は、現在、以下のようになっている（図１）。

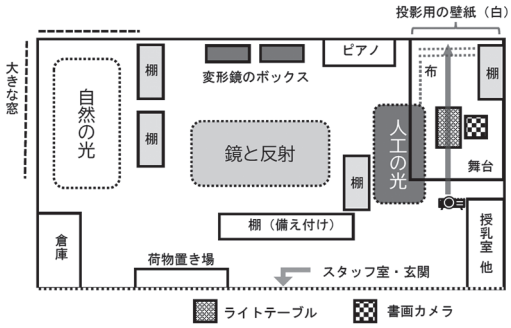


図１ アトリエ空間のエリア分け（2023 年 3 月現在）

構成としては「光と影」をテーマに大きく３つのエリアに分けている。大きな窓がある東側を「自然光を生かすエリア」とし、天候による光の変化を感じることができる場となっている。一方、舞台のある西側は、ライトテーブルや書画カメラとそれらを投影するプロジェクターを設置した「人工光を生かすエリア」とした。投影された映像の関係性などを楽しむ場となっている。また、それらのエリアの役割を明確にするために棚で空間を仕切り、その間の場所を「鏡と反射のエリア」とし、それぞれの環境を繋げる役割をもたせた。鏡面が凸と凹に湾曲した大きな変形鏡のボックス（巾 120 ×奥行 45 ×高さ 45 センチ）やミラーシートを使用した手持ち鏡などを置き、映ることを楽しむ場となっている。

また、アトリエ空間の設置においては、子供や保護者が素材と出会い、手に取りたくなるような素材選びが重要となってくる。講師の助言をもとに、プロジェクターで映すと、面白いもの、色に出会えるもの、触感が異なるもの、自然物と人工物といった対比できるものなどを意識して素材などを購入した。

子供たちは、それらの素材とそれぞれのエリアの環境と関わりながら、アトリエ空間の中で光や影を感じとっている（図２）。

その他、アトリエへの理解や素材との関わり方に不安をもっている保育アドバイザーのために、講師

図２ アトリエ空間での光を感じる子供たちの様子
（左は自然光、右は人工光のエリアでの活動）

によるアトリエ体験や子供との関わりを見学する研修の機会も重視している。以上のように、アトリエ空間の設置により、徐々に人、もの、空間の変容に繋がりつつある。

２．アトリエを活用した研修

アトリエ空間が構成されると同時に、『すくすく』の環境を活用する機会も増やすよう、実験的に普段の授業や研修にアトリエ空間を使用することにしている。例えば、本学主催「幼児教育リカレント講座～環境と保育～」の第２回「環境を通して行う保育実践①　物的環境を生かした保育（造形の環境）」（2022 年 6 月 25 日実施、30 名参加、120 分）の講座ではその内容の一部を、『すくすく』のアトリエ環境の中で実際に受講者が体験する活動（50 分程度）に充てた。

この講座は人工光を使用した活動内容とし、素材と光や影との関わりを試す時間とした。使用した機器はアトリエに設置しているライトテーブルや書画カメラ、プロジェクターの他、直接床に投影できる単焦点プロジェクターや懐中電灯なども光源として準備した。また、素材としてはカラープラカップ、クリアーポケット（カラー）、クリアーストロー（カラー）、アクリル積み木などを準備し、赤、青、黄、緑で色分けして机に置いた。その他、紙類、布類、発泡緩衝材、目隠しシート（窓ガラス用）、保温アルミシートなどの素材も準備した。

まずは一つの素材を選び、「何を語りかけていますか」と質問し、自分自身との関係性を考える時間をとった。参加者は素材との対話を行い、いろいろな見方や感じ方、関わり方を探していく。そのあと、その他の素材を選んで、どういうふうに映るのか」、いろいろ試してみる時間にした。素材同士を組み合わせたり、重ねたり、形を変えてみたりして、自分なりに色、形、素材との関わり方を探し、楽しんでいる姿が見られた（図３・図４）。

最後に、受講生が取り組んだことについて、全員で共有した。研修後、アトリエ空間への興味や、素材とじっくり関わることの面白さ、重要性などについての感想が聞かれ、教室とは異なった学内施設を生かした研修の可能性を感じることができた。

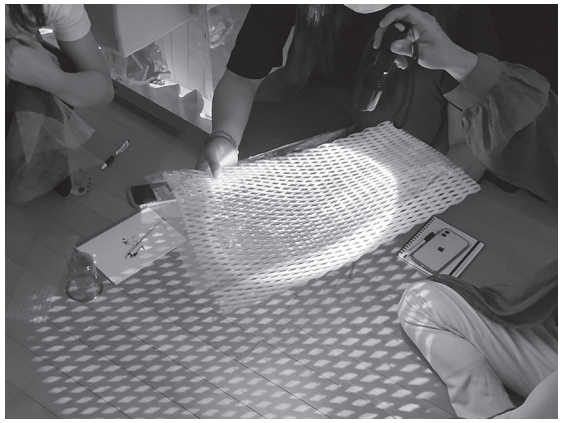


図３ 発泡緩衝撃材とクリアーポケットの関わり

図４ プラカップに水を注ぎ、その揺らぎとその他の素材との重なりを楽しむ受講生の様子

おわりに

以上、『すくすく』におけるアトリエ空間の構成や、そこで行った研修について紹介してきた。今回、本プロジェクトに参加することで、教職員、子供や保護者、アトリエリスタ、業者などの人との繋がり、アトリエという環境や居場所をつくっていくこと、素材との対話など、関わることの面白さを体験することができた。それは、学内にある施設であるからこそ可能であったと考える。

現在、さらに『すくすく』ならではの、光の美しさや発見を提供できるアトリエ空間の構成に向けて、環境の更新を行っている。アトリエ空間の設置や研修を行うことで『すくすく』の環境や、それに関わる人の変容に繋がってきているが、私自身、これらを授業等に生かすことで、自身の教育方法や学生の変容にも繋げていきたいと考える。素材との出会わせ方を工夫し、素材と対話できる時間を増やすことで、「素材を見る力」や「素材と対話する力」などを育て、「驚く」、「発見する」、「探究する」ことができる保育者・教員養成の授業を実践していきたい。

註
1　森眞理・猪田裕子・須増啓之、「大学キャンパス内における『子育て支援ひろば「すくすく」』の役割の変化～アトリエ空間の構成から～」、『児童教育学研究』第 42 号、神戸親和女子大学児童教育学会、2023 年、pp.217-235
2　同上、p.224

一般社団法人日本美術教育学会 2022 年度（令和 4 年度）第２回理事会報告

日時：2022 年 7 月 17 日（日）15:00 ～ 17:30
場所：滋賀大学教育学部新関研究室
出席者:大橋　功、新関伸也、松岡宏明、細谷僚一、藤本陽三
欠席者：（委任状）藤田雅也、青木宏子、 石川和代

理事会が成立していることを確認する。

審議事項
⑴ 2022 年度　第 15 回神林賞（日本美術教育学会実践研究奨励賞）には、滋賀県大津市立瀬田北中学校の馬淵哲氏が選出され、承認された。

⑵第 7 期（2023 ～ 24 年度）理事・監事案について代表理事選出、業務執行理事、理事、監事を選出し、承認された。

⑶ 2022 年度「造形芸術教育協議会」について
　第 1 回を令和 4（2022）年 10 月 16 日（日）に、第 2 回を令和 5（2023）年 3 月 19 日（土）に開催されることになり、日本美術教育学会からは、大橋功、松岡宏明、藤田雅也、細谷僚一、清田哲男が出席することとなった。
　議題は事前に他学会に原案提示し、オンライン会議（Zoom）とする。
　幹事学会は日本美術教育学会で、担当窓口は代表理事の大橋功とする。

報告事項
⑴第 71 回瀬戸内大会について
　7 月 30 日（土）対面大会の可否について判断

⑵第 72 回岐阜大会について
　日時：令和 5 年 8 月上旬
　会場：中部学院大学教育学部
　〒 504-0837　岐阜県各務原市那加甥田町 30-1
　https://www.chubu-gu.ac.jp/access/
　記念講演：斎藤亜矢氏（京都芸術大学文明哲学研究所教授）
　実行委員会は 25 名体制で動いている。8 月 11 日（木）第 4 回実行委員会岐阜大会の開催を予定している。愛知・岐阜・三重の三県の会員によって実行委員が組織される予定であり、2023 年（令和 5 年）8 月開催を予定している。

⑶編集部（報告 : 松岡理事）
　学会誌『美術教育』307 号発行に向けて鋭意準備を進めている。

その他
　定款に合わせた諸規程の整理について→諸規程原案提示の上、継続審議とする。

一般社団法人日本美術教育学会 2022 年度（令和 4 年度）第２回委員会総会報告

日時：2022 年 8 月 17 日（水）15:00 ～ 17:00
場所：香川大学教育学部 423 教室
出席者：詫摩昭人、藤田雅也、森田ゆかり、松岡宏明、石川和代、大橋功、横山徹、鈴木秀幸、水谷誠孝、新関伸也、細谷僚一、清田哲男、鳥越亜矢、福井一尊、藤本陽三、青木宏子、（大会実行委員長／滝川稔）
欠席者：（委任状）香月欣浩、橋本忠和、中川泰、日野陽子

１．あいさつ

２．議長選出：松岡宏明が選出される。

審議事項
⑴ 2022 年度 第 15 回神林賞（日本美術教育学会実践研究奨励賞）について
・神林賞（日本美術教育学会実践研究奨励賞）選出規程改正案について大橋委員より資料 1 をもとに説明がなされ、審議の結果、承認された。
・第 15 回神林賞について横山委員より資料 2 にもとに説明がなされ、審議の結果、滋賀県大津市立瀬田北中学校の馬淵哲氏に授賞することが承認された。

⑵第 7 期（2023 ～ 24 年度）理事・監事案について
・大橋代表理事より資料 3 をもとに説明がなされ、代表理事、業務執行理事、理事、監事の選出がされ承認された。

⑶ 2022 年度「造形芸術教育協議会」について
・大橋代表理事より第 1 回は令和 4（2022）年 10 月 16 日 (日) 13:00 ～ 14:00、第 2 回は令和 5（2023）年 3 月 19 日 (日) 13:00 ～ 14:00 に開催予定であることが報告された。出席者は大橋功、松岡宏明、藤田雅也、細谷僚一、清田哲男である。議題は事前に他学会に原案が提示され、オンライン会議（Zoom）が予定されている。幹事学会は日本美術教育学会、

担当窓口は代表理事の大橋功が務める。

報告事項

⑴第 71 回瀬戸内大会について

・大会実行委員長の滝川稔の挨拶のあと、事務局長の鳥越委員から第 71 回瀬戸内大会には 144 名が参加予定であることなど、資料をもとに大会実施の詳細が報告された。

⑵第 71 回岐阜大会について

・藤田委員より、資料をもとに第 71 回岐阜大会の進捗状況が報告された。2023 年 8 月上旬を予定、会場は中部学院大学教育学部である。記念講演は斎藤亜矢氏（京都芸術大学教授・芸術認知科学）を予定しており、実行委員会は 25 名体制である。第 4 回実行委員会は 8 月 11 日に開催された。大会テーマについても 2 案が提示され、意見の交換がなされた。

⑶庶務部

・石川庶務部長より、会員の異動、会計などについて報告がなされた。

⑷編集部

・松岡編集部長より、学会誌『美術教育』307 号および会報について報告がなされた。編集部の大会記録メンバーは第 71 回瀬戸内大会より新体制となる。

⑸その他

・新関事務局長より、定款に合わせた諸規程の整理について報告がなされた。

・静岡支部の鈴木委員、兵庫支部の清田委員より支部活動の報告があった。

新年度より学会費値上げ

（会報 No.151 掲載済ですが、再度掲載します）

昨年度から学会費の値上げについて、検討してまいりました。先の委員総会で承諾されましたので、2023 年度より年間の学会費を 6,000 円から 8,000 円となります。出費多難の折、誠に恐縮ですが、ご協力をお願い致します。

その理由は、学会運営と事業展開に関わる経費増額がどうしても必要と判断されたからです。

1 つ目は学会事業をより充実させて展開するためです。すでに委員会によるオンライン連続セミナーや支部活動の自立的な活性化を促すための経費を増額していますが、新たに、オンライン等を活用した論文執筆に関する連続セミナーや外部講師のセミナーなどの企画、さらに学会の Web ページのリニューアルを計画しています。

2 つ目は、学術研究大会開催に関わることです。ウィズコロナの時代において、対面だけではなく、オンラインやハイブリッド形式の大会開催への備えも必要となってきます。これまでは、会員個人に負う機器操作や配信をしていましたが、業務負担軽減のため外部の専門業者等に依頼する必要があります。また、大会開催にあたっては、準備や大会開催に関わる様々な業務に対して、学生・院生や補助の方への謝金を恒常的に予算化したいと考えます。

3 つ目は、法人に相応しい事務の外部委託のための予算が必要なためです。会計及び会員管理を始め、学会誌発行に関わる業務全般を見直し、より合理的で維持可能な外部委託を検討していきます。

以上のような理由の他、これまでは、学会理事や委員の力量、ボランティア的な働きに依存した学会運営となっているところがあります。学会に関わる事務やそれに費やす時間は本務以外であり、無報酬で行っています。細かなことですが、様々な連絡・打ち合わせで発生する電話代やオンライン経費（Zoom 代、Wi-Fi 環境）など、役員個人が負担していたり、大学に勤務しているメリットでまかなわれていたりします。本来は学会業務にかかわる諸経費、たとえば通信費、企画のための調査研究費、旅費などの諸経費は、学会業務である限りすべて予算化し、余裕を持たせた会計にしておくべきだと考えられます。

このような理由から、学会費値上げについて是非ともご理解をお願い申し上げます。

会報のデジタル化

2023 年度発行分の会報から、紙面をデジタル化をし、紙ベースではなく、HP 上に公開し、会員各自がダウンロードして読むという形になります。

紙で会員のみなさまにお送りするのは、これが最後となります。

また、それに伴い、過去の会報をアーカイブ化して HP に順次掲載していく予定です。

整いましたら、HP やメールでお知らせします。

デジタル化をすることで、紙面のカラー化や、今までは制限があった文字数を気にすることなく、研究発表や実践報告を書いていただけると期待しております。

会員のみなさまには、引き続き、執筆を依頼した

【編集部よりお知らせ】

2023 年度より**編集部の連絡先及び投稿先**が下記に変更になります。

藤 田　雅 也
静岡県公立大学法人　静岡県立大学
短期大学部 こども学科（美術教育研究室）
〒 422-8021 静岡市駿河区小鹿 2 丁目 2 番 1 号
E-mail：fujita@u-shizuoka-ken.ac.jp

折には、お引き受けいただけますよう、お願いいたします。

学会に登録されているメールアドレスが変更になりましたら、必ずご連絡ください。HP の更新がありましたら、メールマガジン形式でお知らせが届くようになっております。

第 71 回日本美術教育学会瀬戸内大会報告

2022 年 8 月 18 ～ 19 日に開催されました第 71 回日本美術教育学会学術研究大会瀬戸内大会の報告です。

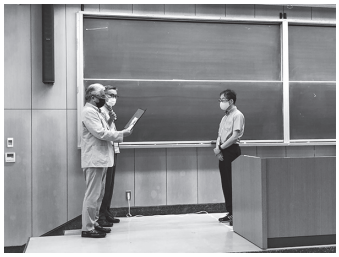
【参加者数】
大会参加申込数　158 名
参加者数　　145 名（出席率：91.8%）

【種別】
会員　99 名
一般　18 名
業者　16 名（協賛会員）
学生　12 名
大学美術教育学会会員 1 名、美術科教育学会会員 2 名の参加がありました。

【参加者の職種別内訳】※数値は実数　（%ではありません）

大学（教員）	53	こども園	2
小学校	9	中学校	10
高等学校	7	専門学校	1
支援学校	3	学生	16
元教職	4	美術館	7
NPO	5	行政	4
絵画教室	2	業者	16
その他	3	不明	3

挨拶をする滝川実行委員長


神林賞受賞の馬淵哲先生

会員異動

（会報 No.151 号以降・敬称略）

【新入会員】
芦田　風馬　佛教大学　特任講師
高橋　直子　本巣市立糸貫中学校　教諭
坂本　　健　尚絅大学短期大学部幼児教育学科　准教授
平田琳太郎　岡山大学教育学研究科教育科学専攻
畝村　真帆　碧南市立東中学校　教諭
島谷あゆみ　広島大学附属東雲小学校　教諭
西薗　　静　大阪府教育委員会（高等学校教諭）
立石知恵美　奈良保育学院（表現造形 担当 教員）
佐藤　文子　愛知県立芸術大学美術学部陶磁専攻　准教授
楊　　榛　武蔵野美術大学造形構想研究科造形構想専攻博士後期課程
向野　康江　茨城大学　教授
川口　克代　とんの幼稚園　園長
野田こず恵　常陸太田市立世矢中学校　教諭
入口　　愛　名古屋女子大学　講師
加藤　浩司　三重県教育委員会事務局　指導主事

【所属変更】
太田　　望　函館大谷短期大学
大橋　　功　和歌山信愛大学教育学部子ども教育学科　教授
山田　勝洋　名古屋女子大学総合科学研究所
馬淵　　哲　滋賀大学　准教授
新関　伸也　東海大学児童教育学部　教授
牛島光太郎　中国学園大学子ども学部子ども学科

【退会】
森高光広／山本秀麿／山谷理／白石朝子／二上正司／塩見考次／小川史／松村一樹

異動があった場合は、なるべく早く本部（E-mail: honbu@aesj.org）までお知らせください。

経費節減の為、クロネコヤマト DM 便を利用しております。日本郵便に転居届を出されていても、対応してませんので、転居は必ずお知らせください。

年度末・年度始めの異動による転居予定がある方は必ずお知らせください。